

謎多きサメ 卵の殻採取

骨格標本へ解剖開始 鴨川シーワールド



館山沖で定置網に迷い込み、その後死んだ珍しいサメ「メガマウスサメ」(雌、体長約5・4メートル、体重1・2ト)を冷凍保存していた鴨川市の水族館「鴨川シーワールド」で24日、生態解明と全身骨格の標本化に向けた解剖が始まった。体内から卵の殻が採取され、生態や生殖機能を解明する手がかりとして、期待が高まっている。

サメに触れる子供たちと仲谷名誉教授(右)(24日、鴨川市で)

解剖にあたったのは、サメの生態に詳しい仲谷一宏・北海道大名誉教授(72)や解剖経験のある水族館関係者。子宮内から卵の殻が1個見つかった。

メガマウスサメは、子宮内で卵が孵化するの、卵を産むのかなど、未解明な点が多いが、殻の詳細な分析で明らかになる可能性があるという。子宮の状態から出産経験のあるサメとみられ、仲谷名誉教授は「メガマウスサメの卵の殻の採取は世界でも聞いたことがない。もう少ししたてば赤ちゃんが形になるところだった」と話している。

解剖には、同水族館年間

会員の小中学生約50人も立ち会い、興味深そうに触ったり、えらに手を入れたりしていた。解剖作業は3日以上かかる見込みで、今後は、専門業者も参加して標本づくりに向けた骨の採取が本格化する。